NPO未利用資源事業化研究会会員限定版

未利研メルマガ

第35 号

繊維製品のサーキュラーエコノミーを目指して

NPO 法人未利用資源事業化研究会
理事長　木村照夫

１．はじめに

近年、サーキュラーエコノミーという言葉を様々なところで耳にし、サーキュラーエコノミーに関する展示会も頻繁に行われるようになってきた。サーキュラーエコノミーとは何なのか？については本メルマガ第 24 号において武田至弘氏（ミリケン理事）から詳しく説明されているのでここでは省略するが、サーキュラーエコノミーの構築を目指して企業の活動が活発になるとともに、異業種でチームを結成して取り組む団体も急増している。筆者らも異業種協働体として繊維製品のサーキュラーエコノミーシステム構築を目指していずれも筆者が代表理事となって 3 件の一般社団法人を立ち上げた。ここではこの 3 つの一般社団法人について紹介したい。

2. サーキュラーエコノミーと一般社団法人の役割

繊維製品のサーキュラーエコノミーに特化すると、繊維製品を長く使い、活用されていない資源から如何に価値を生み出すか、しいては如何に繊維製品のゴミを無くすかが課題となっている。

図 1 は繊維製品の流れと設立した 3 件の一般社団法人を示している。以下に順を追って内容を紹介する

2.1　一般社団法人 Textile Circular Network

従来から重要視されてきた“リサイクル”という概念は廃棄物が発生してからその廃棄物の使い道を考えることであったが、“サーキュラーエコノミー”ではモノづくりの出発点で廃棄物や汚染を生み出さない設計を行う点で異なっている。また、廃棄物にならないように繊維製品や原材料を使い続ける仕組み作りが必要となる。繊維製品に関わらず自分にとっては不要（ごみ）であっても他人にとっては宝物であることも少なくない。繊維製品も必要とされる者に引き継いで出来るだけ長期使用することが望ましいことは言うまでもない。そのためにはいかに次につながる良い状態で回収するかが重要である。そのような仕組み作りを目指して一般社団法人 Textile Circular Network が発足した。従来から衣服の回収は自治体、アパレル企業や故繊維業者におい

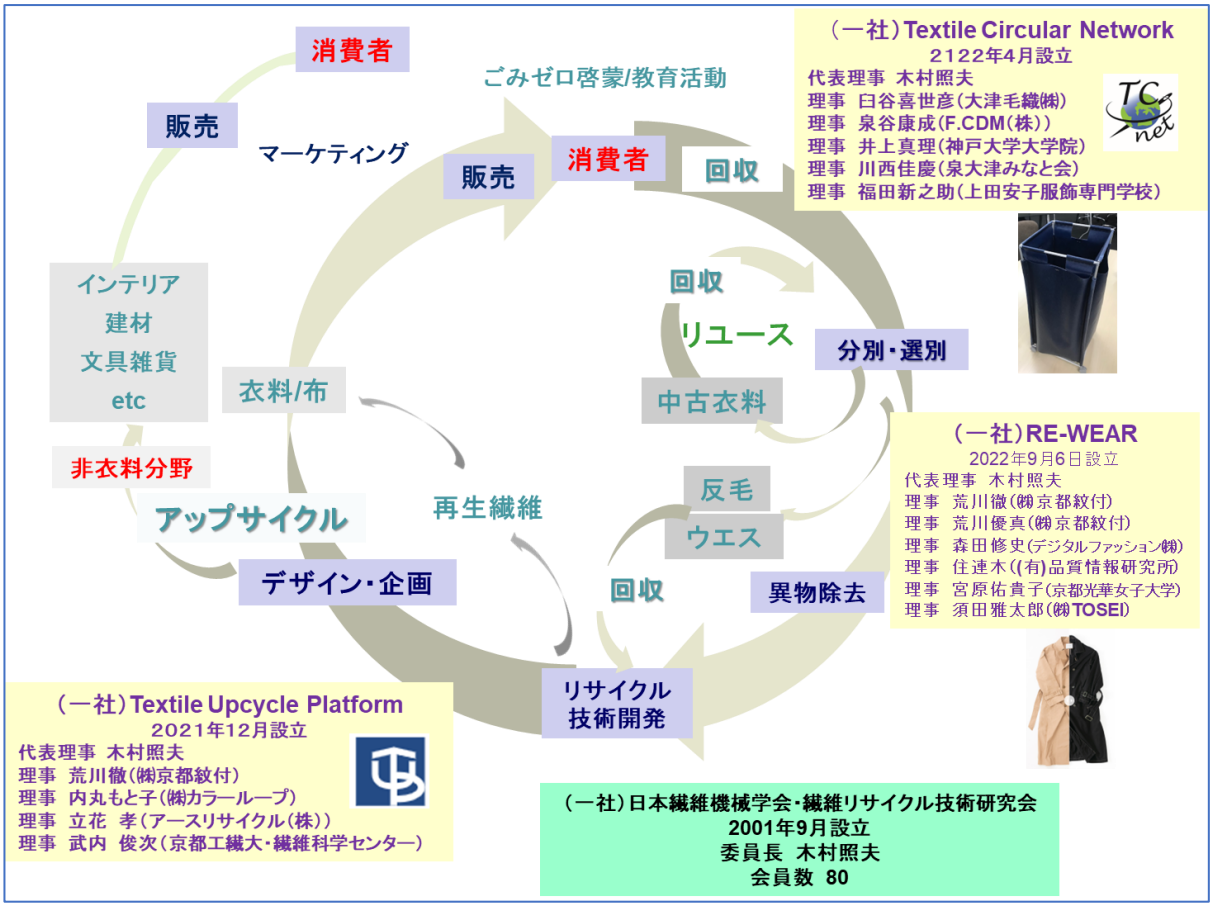

図１　繊維製品の流れと一般社団法人

て行われているが、回収した後のトレーサビリティが不明確な場合が多く、回収に協力した消費者は適正に処理されていると信じる以外になかった。しかしながら現実には回収者が謳っているルートをたどっていない場合もあるとのことで、今後はより回収量を増やすために当法人ではトレーサビリティの仕組み作りも目指している。また、次の段階で有効に使用するにはより良い状態で回収する必要があり、消費者と一体感を持って有効かつ効率的な回収システムの構築を目指している。

2.2　一般社団法人 REWEAR

廃棄物が増加する要因の一つに「使い捨て文化」の定着がある。現在は衣服の一か所でも色褪せたり、シミがついたりするとすぐに廃棄する習慣が染みついている。また、縫製箇所がほつけたり、一部に損傷が生じた場合も同様である。非常にもったいない話である。一昔前は国民が貧乏であったことも一因かと思われるがとことん修理（お直し）して着崩したものである。そこで、再びお直しの文化を創る目的で設立したのが一般社団法人 REWEAR である。

この法人は色褪せた衣服を真っ黒に染め直す事業展開を行っている深黒染めで有名な㈱京都紋付が中心となって結成されたが、今後はネットワークを広げて黒だけではなく好みの色に染め直せるシステムの構築や再縫製の分野にも拡張する予定である。図 2 および図 3 はそれぞれ当法人の設立を記念して今年（2022 年）の 9 月 6 日（クロの日）に開催された染め直した衣服の展示

会とセレモニーの様子を示している。参加者のドレスコードは「黒」として行われ、アトラクションや食事も黒を基調に行われた。ここで本法人では単なるお直しではなく、元の状態よりも価値を高めた、例えば染め直した方がデザインが優れるなど、アップサイクルを目指している。

図２　染め直した衣服の展示会の様子

図３（一社）REWEAR の設立セレモニーの様子

2.3　一般社団法人 Textile Upcycle Platform

繊維製品、とくに衣類は上記のように衣類として水平循環することが理想であるが、廃棄衣類は衣類としての使用が困難な場合が少なくない。従来はこれらの衣類として再利用できない物は反毛やウエス原料として使用されてきたが、廃棄物から経済効果を生むためにはより付加価値のある用途展開（アップサイクル）が望まれている。そこで繊維廃材から付加価値のあるモノづく

りを目指して設立したのが一般社団法人 Textile Upcycle Platform である。この法人は現在は繊維廃材の色を活用したプロダクツ開発を行っている㈱カラーループがメインになっているが、異業種から幅広く会員を募集し、異業種連携を強化して、繊維廃材を新たな成形素材として今までになかった消費者が喜ぶモノづくりを目指している。また、繊維廃材の再利用の壁になっている要因の一つが異種材料/副資材の混合である。そこで当法人では素材分離システムの構築も視野に入れている。

なお、昨今、アップサイクルを謳う商品が数多く世の中に出ているがアップサイクルの定義が非常に曖昧であり、ブームに乗って何でもかんでもアップサイクル商品と謳っている傾向がある。アップサイクルとは一般的には余計なエネルギーを使用しないでおしゃれな製品にリメイクすることとして捉えられているが、筆者らは「本来であれば捨てられるはずの繊維系廃棄物に、デザインやアイデアといった新たな付加価値を持たせることで、別の新しい製品にアップグレードして生まれ変わらせること」と定義している。しかしこの定義でも何を基準にアップしたのか、非常に曖昧であり、また、価値があるかどうかは消費者が決めることであって、生産者が一方的にアップサイクル品であると主張するのは何となく違和感がある。そこで本法人ではさらにアップサイクルについての議論を重ねて将来的にはアップサイクルの認証制度制定も視野に入れている。アップサイクルをどのようにとらえるか、読者の皆様から色々なご意見を賜れば幸いである。

筆者は上記の 3 つの一般社団法人以外にも繊維と繊維機械の発展を目指す学術団体である一般社団法人日本繊維機械学会内の一つの専門委員会として 21 年前に設立された繊維リサイクル技術研究会の発起人代表として現在も委員長も務めている。この委員会では産官学のリサイクル関係者が一堂に集い、多くの情報交換を行っており、昨年（2022 年）の 12 月には第 145 回目の情報交換会が約 100 名の参加者を得て開催された。

近い将来にはこれらの種々の団体を有機的に連動させて繊維製品のサーキュラーエコノミー構築を加速したいと考えている。繊維廃材は未利用資源の一つであり当ミリケンとの協働体制もとって行きたいと考えている。ミリケン会員の皆様のご支援を心より願っています。

以上

次回発行予定

2023 年 3 月

主な内容：次回情報交換会について/未利研会員様・会員企業様の取り組み現場から/etc.

編集後記

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。今年も未利研メルマガをよろしくお願いいたします。
新年号では、繊維製品のサーキュラーエコノミーへの取り組み活動から立ち上がった３つの一般社団法人の話題を取り上げさせていただきました。ミリケンも協働体としての連携を密にしていきたいと願っています。今後のさらなるご発展をお祈りいたします。
皆様にとって素晴らしい１年になりますよう、心よりお祈りいたします。
今後とも未利研メルマガをご愛読ください。内容についてのご意見、希望する話題・内容、および配信停止・解除の連絡は下記、田村までメールして頂ければ幸いです。

無断転載禁止

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

NPO 法人未利用資源事業化研究会 メルマガ編集委員長
田村　哲志 tetsuji_tamura@miriyoshigen.jp
〒602-0898 京都市上京区今出川通烏丸東入上る相国寺門前町 636
TEL/ FAX：075-252-5501
https://miriyoshigen.wixsite.com/miriyoshigen

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊